

抗がん剤の副作用について No. 2

悪心・嘔吐

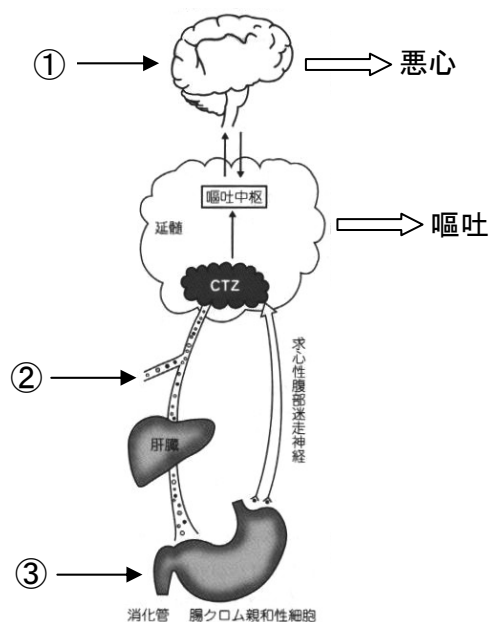
はじめに

抗がん剤を使用した場合の副作用には、自覚できるものと、検査によってわかり自覚症状が現れにくいものがあります。自覚できる副作用のうち、最も頻度が高く、患者様の生活の質に最も大きく影響するものが悪心・嘔吐です。

悪心・嘔吐はどうしておこるのですか？

抗がん剤を使用したときに起こる悪心・嘔吐は乗り物酔いをしたときに起こる作用とは異なるものです。右の図のような3種類の経路によって、悪心・嘔吐が発現します。

- ① これまでに受けた抗がん剤により悪心・嘔吐を経験したことや、その他の精神的因子や感覚刺激によって誘発される大脳皮質を介する経路です。また、嘔吐は、延髄の嘔吐中枢（TVC）と呼ばれる部分が刺激を受けることによっても発現します。
- ② 抗がん剤などの嘔吐誘発物質が、延髄にあるCTZ（化学受容器引金帯）と呼ばれる神経伝達物質が集まっている部分に直接作用し、その刺激がTVCに伝えられることによって発現します。
- ③ 抗がん剤が、消化管粘膜の腸クロム親和性細胞を刺激することにより、ここから5-HT₃と呼ばれる物質が大量に分泌されます。5-HT₃は、腸の神経終末にある受容体を刺激し、CTZなどを介してTVCに刺激が伝えられ嘔吐が発現します。これ以外にも、消化管に受けた刺激がさまざまな神経伝達経路をとおして、TVCを刺激することもあります。



抗がん剤による違いはありますか？

() は商品名

抗がん剤の種類や使用する量によっても異なるので、一概には言えません。起こりやすい代表的な薬剤はシスプラチン（ブリプラチン）、ダカルバジン（ダカルバジン）、ニムスチン（ニドラン）、ドキシソルビシン（アドリアシン）、マイトマイシンC（マイトマイシン）、ダクチノマイシン（コスメゲン）、シタラビン（キロサイド）等です。

起こりやすい時期はいつですか？

またそれにはどのように対処すればよいのでしょうか？

予測性悪心・嘔吐

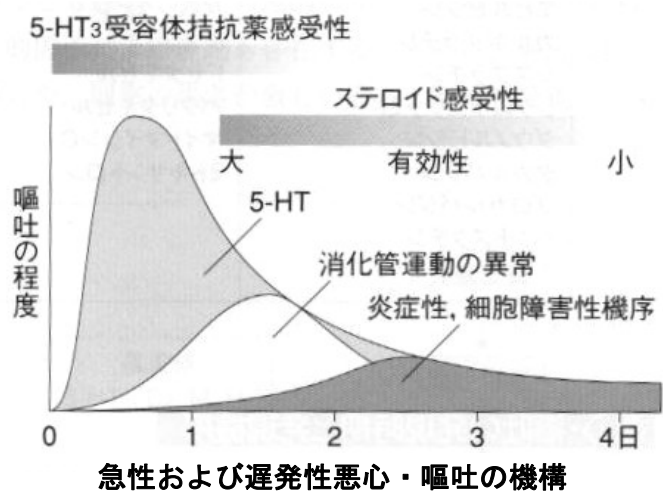
前回の化学療法で悪心・嘔吐がひどかった事や、同室の患者様のつらい状態を見た経験などの精神的要因からもたらされる場合です。あらかじめ抗不安薬などを使用することによって予防できます。

急性悪心・嘔吐

抗がん剤投与後1～2時間後に起こり、24時間以内にはだいたいおさまります。主に先に述べた③の仕組みによって起こるとされていますので、5-HT₃に対する拮抗薬であるグラニセトロン（カイトリル）、アザセトロン（セロトーン）、オンダンセトロン（ゾフランザイディス）が有効です。

遅発性悪心・嘔吐

抗がん剤投与後24時間以内に起こり、数日間持続します。抗がん剤の種類、投与量によっても起こる頻度が異なります。仕組みははっきりとはわかりませんが、抗がん剤が腸管を刺激し、インターロイキンやプロスタグランジンという物質が多量に作られることにより起こると言われています。これには副腎皮質ホルモン（ステロイド）であるデキサメタゾン（デカドロン）などが有効です。5-HT₃に対する拮抗薬あるいはその他の制吐剤ドンペリドン（ナウゼリン）、メトクロプラミド（プリンペラン）等と併用して使用します。



自分で気をつけておくこと（予防・対策）はありますか？

投与前 消化のよいものを摂りましょう。睡眠を十分に取らしましょう。必要であれば、睡眠薬を使用してもよいでしょう。

投与中 リクライニングシートを倒し、全身の力を抜いて、リラックスを心がけましょう。音楽を聴く、本を読むなどして、気持ちを治療とは別の方向へむけるのもよいでしょう。

投与後 味が濃いもの、香りがあるもの、刺激のある食事は避けましょう。自分が食べたいものを食べたいときに食べることが原則です。においにも敏感になることがあるので、米飯やおかゆをパン等に変えることも有効です。